



Title	イタリア人の子供のこと : "The Eternal Moment"と Where Angels Fear to Tread
Author(s)	筒井, 均
Citation	Osaka Literary Review. 1968, 7, p. 84-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25780
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イタリア人の子供のこと ——“The Eternal Moment” と *Where Angels Fear to Tread*

筒 井 均

“The Eternal Moment”（以下 EM と略す。）はフォースターの他の短篇小説と比べ趣を異にした作品である。作者自ら幻想とよぶ¹ 短篇の中で、これだけは写実性を多く含んだ作品であるからである。しかし、ヒロインであるレイビーの内部に息づいている衝動において他の短篇と同質のものを持っていると考えられる。そして彼女の価値観は EM と同年に発表された *Where Angels Fear to Tread*（以下 WA と略す。）におけるヒロイン、アボットの精神と共通している。そこで私はこの小論において EM と WA とを比較しつつ、そこにみられる一つの重要なフォースターの手法を探ってみたい。

当面の問題である1905年の作品分析に入る前に、まづ1904年の作品におけるフォースターの手法をみておきたい。1904年の作品はすべて1901年ケンブリッジ卒業後の旅行の経験に基づいている。その作品とは、創作だけに限ると、発表された順に、“The Road from Colonus,” “The Story of a Panic,” “The Other Side of the Hedge” の三篇であるが、前の二つが旅の体験に直接関係を持っている作品である事は明らかである。これらはフォースター自身のことばを借りると *genius loci*（土地の霊）² とのふれあいから生まれた作品であるということが出来る。そして大切なことはこの *genius loci* とのふれあいを表現するために、フォースターがパン（Pan）を用いていることである。

ところでパンは羊や羊飼いの守護神であると伝えられるアルカディアの神である。OED の説明によるとパンは二つの属性を持っている。すなわち、パニック（恐慌）を起こさせる一面と、後になってそれに加わった「全」(all) の一面との二つである。元来 Pan という語そのものには牧人の意味があった。³ そして後に ‘the universe’ と考えられ、‘an impersonation of Nature’ (OED) 或は ‘universal god’ (*The Oxford Classical Dictionary*) と考えられるようになったのである。従って「全」とはパニックの面をも含むものと思われるが、ここでは便宜上二つに分けて考える。この二つの側面を持つパンを使ってフォースターは創作を始めたのであるが、このことは彼の創作技法に大きな影響を与え、彼の創作の根底をなしている。⁴

以上のパンの二つの属性のうち、後に述べることとの関係から、私たちにとって重要な意味を教えてくれるのは「全」としての側面を持つパンである。1904年の短篇小説において、主人公たちが自然の中で生の意味を感得するとき、彼らと共に「全」としてのパンが存在しているのである。例えば “The Story of a Panic” のユースタスが “I understand almost everything.” と叫ぶときの感情や、“The Road from Colonus” においてルーカス老人がプラタナスの大木の中で持つ次のような感情は、このパンの一面を表わすものであろう。

Others had been before him — indeed he had a curious sense of companionship. Little votive offerings to the presiding Power were fastened on to the bark — tiny arms and legs and eyes in tin, grotesque models of the brain or the heart — all tokens of some recovery of strength or wisdom or love....

There was meaning in the stoop of the old woman over her work, and in the quick motions of the little pig, and in her

diminishing globe of wool.... To Mr. Lucas, who, in a brief space of time, had discovered not only Greece, but England and all the world and life, there seemed nothing ludicrous in the desire to hang within the tree another votive offering — a little model of an entire man.⁵

フォースターは1904年の作品でこのように自然の中で感じる「全」を主として描いているのである。そして注意すべきことはここでの「全」はパニックの一面を含んでいないことである。

さてそれではこういうパンの側面が EM と WA ではどのように描かれているであろうか。EM は 1905 年 6 月から三ヶ月にわたって *The Independent Review* 誌に連載された。そしてその終了後二ヶ月程して WA が出版されている。この二つの作品には随処に類似点⁶ がみられるが、その中で注目すべき点はイタリア人の子供に関するイギリス婦人の行動である。イタリア人の子供とは、EM ではフェオの 5 才になる子供であり、WA ではイギリス人リリアとイタリア人ジーノのあいだに生まれ、最後に事故死する赤子のことである。この子供らを各々の物語のヒロイン、レイビーとアボットは、イギリスで育てることを提案し、そして拒絶され断念する。子供を引きとることを断念するとき彼女らが考えている問題は、各々の物語において極めて重要な位置を占めている。

まづレイビーの場合を見てみよう。彼女は 20 年ぶりに訪れたヴォルタで土地と人間に対して罪悪感を持つ。20 年前彼女はこの村ですばらしい経験をした。イタリア人フェオから求婚された事である。彼女はその経験を一篇の小説にまとめた。小説が出版され、ヴォルタは一躍脚光をあび、その結果ヴォルタは観光地と化し、フェオもまたホテルの支配人となり昔日の面影はない。これがレイビーの罪悪感の原因である。土地と人間が美と尊厳を失い、世俗さ (worldliness) と卑俗さ (vulgarity) を帯びてしま

ったことに、レイビーは責任を感じ、心を痛めるのである。そしてフェオに子供があるということを知ると、その責任感から子供を自分がイギリスで育てようと提案する。彼女の提案はフェオを当惑させ、と同時に彼女自身もいわゆる品位 (respectability) を欠くことばを口にする。

‘Answer “yes” or “no”; that day when you said you were in love with me — was it true?’⁷

彼女をこのような行動に駆り立てたのは何であろうか。彼女は困惑し切っている中年のフェオをみながらこうつぶやく。

‘I have only vexed him. But I wish he would have given me the boy. And I wish he would have answered my question, if only out of pity. He does not know the sort of thing that keeps me alive.’⁸

ここでレイビーが云っている「自分を生き永らえさせているもの」がこのとき彼女を動かしているものであり、それは「あの日」の経験から得たものである。フェオが山上で彼女に求婚した「あの日」彼女はフェオから何かを得ていたのである。彼女が自分の提案が拒絶された後もなおある勝利感を感じ、“[I] had lived worthily” (CSS, p. 246) と考えるのは、この「何か」の為である。

今述べてきたレイビーの「自分を生き永らえさせているもの」は、アボットの場合を考えると明りようになる。アボットはジーンとリリアのあいだに生まれた子供に対して責任を感じている。それはその子供が自分の無知が原因で生まれてきたと考えているからである (WA, p. 139)。子供

の誕生がモンテリアーノを罪の街としたと彼女は考え、そういう街で子供は育てるべきでないと主張するのである。そこで彼女はジーノに話すためにイタリアに出かけるのである。

ここで注意しなければならないのは、レイビーもアボットも、子供を自分が育てようと心に決めるとき、その子供を実際には眼にしていないことである。従って、彼女らの子供に関する発言は彼女ら自身の倫理問題に関わっている。自分が責任を負わねばならないと感ずる街で育てるべきでないと考えたり、自分の無知故に罪の街にしてしまった所から連れだそうと考えることは、子供そのものに関係なく、ただ彼女ら自身の倫理だけに関わる行為なのである。彼女らの行為はいわば自己満足のための行為である。子供そのものの利益を明確に意識しているわけではない。だからアボットがはじめて子供を眼の前にしたとき、事実の重さを納得し、当惑するのである。

She had thought so much about this baby, of its welfare, its soul, its morals, its probable defects. But, like most unmarried people, she had only thought of it as a word — just as the healthy man only thinks of the word death, not of death itself. The real thing, lying asleep on a dirty rug, disconcerted her.⁹

アボットもレイビー同様子供の引きとりを断念するのであるが、彼女がその気持をはっきりさせるのが赤子を湯浴みさせる場面においてである。赤子とジーノと、そしてその手伝いをするアボットを、部屋に入って来たフィリップは“the Virgin and Child, with Donor” (WA., p.157) だと感じるのであるが、アボットはそれより以前赤子を前にしたジーノと話をするうちに彼に対して次のように感じている。

She was silent. This cruel, vicious fellow knew of strange refinements. The horrible truth, that wicked people are capable of love, stood naked before her, and her moral being was abashed. It was her duty to rescue the baby, to save it from contagion, and she still meant to do her duty. But the comfortable sense of virtue left her. She was in the presence of something greater than right or wrong.¹⁰

アボットにとって、日常生活において俗悪なジーノが浄化 (refinement) の心を知っていることは驚きであった。彼女はここで一つの転回をしなければならない。彼女はジーノの存在によって生における一つの真実を知ったのである。レイビーに関連させて云えば、これがレイビーを生き永らえさせたものであろうし、レイビーがフェオから得たものであった。

このように見てくると、EM と WA のヒロインたちはその倫理観において共通点を持っていることがわかるであろう。彼女らの行動の共通点もそこから生じてくるものである。その共通点とは第一に、イタリア人の子供を現実には見ずに子供に関して行動すること、第二に、子供をひきとろうというとき、そのことによって幾分か自分の罪を取り除こうという意図があること、そして第三に、提案が失敗に終るときでさえ彼女らの心にあるのは、生の新しい真実、人間とのふれあいから人間の心に生の力が宿るという認識であること、この三点である。

次に上に述べた第三の共通点にある生の新しい真実、生の力とはどういうものであるか考えてみたい。

先にも少しふれたように1904年の短篇においてはそれは、人間が自然の内奥に入り込み、そこで自然と一体となるという実感として描かれていた。ルーカスがプラタナスの中で感じた先人との連帯感、ユースタスの感

じる自然の存在感は、彼らの生に意味を与え、眼にするものすべてに光を与えた。すなわちこれがパニックの一面を含まない「全」としてのパンの存在の意味であった。1904年の作品ではパンの「全」が単一化され、それ故に純粹化されていたといえることができる。今、便宜上アボットだけに限って考えてみると、1905年の作品においてはジーノの存在に見るように、善悪を超えたもっと偉大な要素を持つものとしてこの「全」なるものが表わされている。極言を恐れずいえば、パンの全貌を示していなかったといえる1904年の作品における「全」が、はるかに大きく拡大され、パンの全体を包んでいるのがジーノの存在からアボットの得た「全」だといえる。この拡大がアボットの場合、先の引用に見た赤子の実在を論理でなく真に実在そのものを感得する過程と平行して起こっているのである。¹¹ 換言すれば、EM と WA においては、人間存在の中に自然と同質のものを見ようとする作者の姿勢がある、ということである。因みに WA のジーノは自然の一部と描写されている (WA, p. 155)。人間と人間との接触から、人間を内部より揺り動かせ、生に耐えさせる生命力のような「破壊できない何か」(WA, p. 204) が生まれることを作者はみつめているのである。

フォースターのこのような主題に関して、1927年いち早く眼をとめた I. A. リチャーズの言葉¹²を引きながらトリリングは次のように述べている。

I have mentioned the part which death plays in the novels; there is also the portentous theme which I. A. Richards speaks of as the "survival theme" — "a special preoccupation, almost an obsession, with the continuance of life." Appearing first, in "The Eternal Moment", in the strange request Miss Raby makes of the concierge, that he give her one of his children to bring up, it dominates *Where Angels Fear to Tread*, a novel in which the great struggle is for the ownership of a baby, and in which

parenthood is the strongest passion ;¹³

この主題を描くためにフォースターはパンの属性たる「全」を用いたのである。そしてそういう「全」を生みださせる瞬間は *The Longest Journey* のリッキィ¹⁴によって象徴的瞬間と呼ばれるのである。¹⁵

It seems to me that here and there in life we meet with a person or incident that is symbolical. It's nothing in itself, yet for the moment it stands for some eternal principle. We accept it, at whatever cost, and we have accepted life. But if we are frightened and reject it, the moment, so to speak, passes ; the symbol is never offered again.¹⁶

以上に述べてきたことをもう一度くり返すと次のようになる。レイビーが若いころのフェオから得たもの、アボットがジーンから得たものとは、人生において人間が人間の中に見出すそれ自身は何の価値もないものでありながら、ある瞬間に永遠の原理を伝えるパンの「全」としての力である。そしてその力は生を受け入れる力でもある。

異質の文明に接することによって人間は自己を明確にしていくものである。フォースターの場合ギリシャやローマへの旅がこのことにあたる。大学で古典学を専攻したことがその端緒だとすれば、旅が自己を明確に意識する手助けとなった。旅における「場」との触れあいが彼の感覚を鋭敏にしていっただのである。ギリシャの土地によって、イタリアの風土によって、フォースターは自己に目ざめたのである。云いかえれば「場所」が彼を作家にしたのである。¹⁷ 1905年の作品においてはその「場所」の霊が人間の中に宿るものとして描かれ、作家の眼は人間関係へと移っていく。結論的

に云えば、後年 “What I Believe” の中で述べている人間関係への信頼という考え¹⁸ は、1904 年の作品にみられるパンに発したフォースターの、人生における象徴的瞬間を把えるという生への姿勢にその源をみることができるのである。

註

- 1 *Collected Short Stories of E. M. Forster* (London: Sidgwick and Jackson Ltd., 1908), p. v. (以下 CSS と略す.) なお fantasy については *Aspects of the Novel* (London: Edward Arnold, 1963), p. 100. 参照.
- 2 CSS, p. vi.
- 3 Pan の語源として *The Oxford Classical Dictionary* では pa-sc (L. = the Feeder) を, *Encyclopedia Britannica* では paon (Gr. = pasturer) をあげている.
- 4 パンとフォースターの短篇小説との関係について私は、「荒れ狂うパン —— E. M. Forster の短篇小説」(「待兼山論叢」創刊号, pp. 37—53) でくわしく論じておいた.
- 5 CCC, pp. 103—4.
- 6 例えばグラズデンやウィルドが指摘しているように登場人物の類似や、作品の舞台がイタリアであることなどの類似がある. [K. W. Gransden, *E. M. Forster* (Edinburgh and London: Oliver and Boyd, 1962), p. 16. Alan Wilde, *Art and Order: A Study of E. M. Forster* (New York: New York U. P., 1964), p. 93.] またイタリア特有の鐘塔 (bell-tower) への言及がかなり重要な働きを物語の上で持っていることなども共通点としてあげられる. さらに小さな場面ではあるが比較的重要な意味を作品全体に対して持つ場面, すなわち手紙が破られあたりに散られる場面が両方の作品にみられる. この手紙の働きを考えてみるとこの場面の重要さがわかる. つまりヘリトン夫人が破く手紙は, その後ヘリトン夫人のソーストンの性格を導く動機となるものであり (WA), レイランドの妹の手紙はソーストンの性格を表わすもの (EM) だからである. (cf. CSS, pp. 217—9., WA, p. 20, p. 25)
- 7 CSS, p. 244.
- 8 *Ibid.*
- 9 WA, p. 145.
- 10 *Ibid.*, p. 152.
- 11 Cf. Lionel Trilling, *E. M. Forster* (London: The Hogarth Press, 1959), p. 62.
 Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain: A Study of E. M. Forster*

(Stanford, Cal.: Stanford U.P., 1966), p.173.

なおこのような感得する能力についての説明はフォースターの “The Curate's Friend” に次のようにかかれている。

“How I came to see him [=the Faun] is a more difficult question. For to see him there is required a certain quality, for which truthfulness is too cold a name and animal spirits too coarse a one, and he alone knows how this quality came to be in me.” (CSS, p.90)

- 12 I. A. Richards, ‘A Passage to Forster: Reflections on a Novelist,’ *E. M. Forster: A Collection of Critical Essays*, ed. Malcolm Bradbury (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall Inc., 1966), p.19.
David Shusterman もこの言葉を使っている。D. Shusterman, *The Quest for Certitude in E. M. Forster's Fiction* (Bloomington, Ind.: Indiana Univ. Press, 1965), p.74.
- 13 Lionel Trilling, *op. cit.*, p.45.
- 14 因みにフォースターは彼の描いた人物のうち、彼自身に最も近いのがリッキィだと云っている。[Malcolm Cowley(ed.), *Writers at Work* (London: Mercury Books, 1962), p.31.]
- 15 cf. J. B. Beer は先に述べたアボットとジーノの場面を “[Forster's] favourite visionary modes — Italian renaissance painting and Greek mythology” を用いた場面だと説明している。[J. B. Beer, *The Achievement of E. M. Forster* (London: Chatto & Windus, 1962), p.74.]
彼はまたその瞬間のことを “visionary moment” (*ibid.*, p.72) とよんでいる。他にこの瞬間を説明して J. K. Johnstone は美の要素を強調し、H. J. Oliver は愛の感情をその要素だと説明する。[J. K. Johnstone, *The Bloomsbury Group* (New York: The Noonday Pr., 1963), pp.168—72. H. J. Oliver, *The Art of E. M. Forster* (Melbourne: Melbourne Univ. Pr., 1962), pp.24—5]
- 16 *The Longest Journey*, p.159.
- 17 フォースターはグランズデンに、まづ先に人間に関心があると語ったというが (*Encounter*, Jan. 1959, p.77), 作品にみられるのはまづ場所に対する関心である。フォースターの場合、小説の題名が、直接場所を示すものか、場所に類したものであることは意味深い。
- 18 E. M. Forster, *Two Cheers for Democracy* (London: Edward Arnold, 1951), p.78.

なおテキストに用いた WA, LJ はそれぞれ Arnold Pocket Edition, The World's Classics である。

付記. この小論は日本英文学会中国四国支部大会第20回大会における研究発表に加筆したものである。

(November 19, 1967)